

2021年7月11日 部落解放祈りの日礼拝(聖霊降臨節第8主日礼拝)

メッセージ「私たちの結ぶ実」

水谷憲牧師

聖書 マタイによる福音書 7章 15-20節

本日、7月第2主日は、「部落解放祈りの日」となっております。なっておりますとは言っても、日本基督教団で正式に制定されているわけではなく、今から46年前の1975年7月14-15日開催の常議員会で、日本基督教団も宣教の1つの業として、部落解放のために取り組んでいこうと決定したことから、その決意をおぼえて毎年7月第2主日を部落解放祈りの日としていこうという運動が、日本基督教団の部落解放センターを中心に広げられてきたわけです。

部落差別とは、ご存知のように、被差別部落といわれる地域で生まれたから、あるいは住んでいるからという理由で、人を見ることのないままに人としての権利を侵害し、差別するものです。部落差別のなりたちは日本の歴史、特に江戸時代の身分制度が大きく関係しているといわれます。江戸時代には「武士」と「百姓・町人」の間に大きな身分的な格差があり、さらにその下に常に人々から差別される存在としての「穢多^{えだ}」「非人」という階層がありました。この最下層の人々の中には、もともと「キヨメ」の特別な力を持つと考えられ、「ケガレ」を清めるために、町の清掃や死んだ牛馬の処理、皮革の生産などを職業としていたものの、しかし、時代の変化のなかでいつの間にか、清めようとして関わっていった「ケガレ」の方だけが強調されてしまったわけです。そこには、血を汚れたものとして避ける神道の影響や、殺生を禁ずる仏教の教えの影響もあったことでしょう。「穢多」「非人」などの身分の格差は、明治の身分解放令によって形としては消滅したのですが、明治政府が差別を解消するための具体的な政策をつくらなかったために、何百年も続いた部落差別は変わらず社会の中に残り続けました。そして現在も同様に被差別部落の人々は「部落」というだけで安定した仕事に就くこともできず、想う人と結婚もできず、厳しい生活を強いられる人も、今でも確かにいるわけです。

私の個人的なかかわりでいうと、私が学生時代に出会った友人の1人に、被差別部落出身の男がおりました。彼は、はっきり言ってしまえば、あまり誉められた男ではなかった。彼は熊本の被差別部落出身の青年で、私より2つ年上でしたが、普段はとても気さくで面白くない冗談ばかりいう愛すべき人物でありましたが、その一方で非常に気が短く、酒を飲むと人に絡み付いてきて手が付けられない厄介な人物でもありました。酒の場で彼の拳が人の顔に飛んでゆく場面を何度も目の当たりにしたものでありました。ある時、彼を含む友人たちと共にバーベキューをし

た時、突然彼が激怒して友人の一人の胸ぐらをつかみ、殴り飛ばしたのです。殴られた本人も周りもあまりに突然で、「何で彼はいきなり自分を殴るのか、何であいつが殴られなきゃいけないのか」「肉を食い過ぎだって？ たくさん食べたって、いいじゃないか。それが人を殴るほどのことなのか」みんなまったく分かりませんでした。それでその場の空気も凍りつき、気まずい雰囲気、みんなが暗に彼を責めるような雰囲気になってしまった時、彼がなぜみんな分からないのかという悔しさに満ちた表情で、涙をこぼしながら話し始めたのです。

正確ではないですが、彼はこういうようなことを言いました。「肉をみんなで楽しく食べるのはいい。人より少々たくさん食べたっていい。でもこいつはこのバーベキューの主催者の一人なんだ。この場にはせっかく来てくれた初めてのお客さんがいるのに、まるでそれを無視して、初めての場で緊張している人などいないかのように一人よがり振舞うというのはどういうことだ」と。「被差別部落で生まれ育った者も在日も、24時間差別の恐怖と戦いながら生きているのに、みんな差別はもうなくなっているなんて顔をして、そんな人々のことを忘れてやがる。それと同じだ」と。「俺はそれが悔しい」と。

思えば、その友人の怒りはいつも必ず、悪気はなかったにせよ、そこにいる人をまるでいないかのように振舞ってしまう人や、人を軽んじる態度を取る人に対して向けられていたわけです。そしてその光景は、他の多くの人々との出会いの経験と同様、いつもあらゆる言い訳をしてこの世の課題から身を遠ざけようとする私へ石を投げるものとして、私の部落差別問題をはじめとする様々な取り組みの原点となっています。

さて本日は、「実によって木を知る」と題された箇所です。冒頭には「偽預言者に注意なさい。彼らは羊の衣を着てあなた方のところに来るが、その内側は強欲な狼である」という言葉が置かれています。マタイ福音書24:24には「偽メシアや偽預言者が現れて、大きなしるしや不思議な業を行い、できれば、選ばれた人たちをも惑わそうとする」とあります。よく、悪徳商法の業者が独り暮らしの老人などに狙いを定めて、親切を装って近づき信頼させ、莫大な金額の契約を結ばせたりします。先日私が久しぶりに母親と電話をして知ったのですが、実は母も慣れないパソコンを使っている時に「ウイルスに感染しました」といった警告が出て消えなくなり、パソコンが動かなくなったので、警告に示されている番号に電話すると、怪しい日本語を話す担当者に「リモートコントロールで修理するので、まずお金を払って下さい」と言われてコンビニで払ってしまったのだそうです。それから、次々にいろん

な名目で支払いを要求されたので、さすがに怪しいと思って連絡はとらず、念のためカード番号まで変更したとのことでした。悪徳リフォーム会社から数百万円もの被害にあったある認知症の老人は、業者が捕まった後に自分が被害に遭っていたことを知らされても「親切な良い人だったよ」と話していたそうです。うちの母はそんなことはなく怒っていましたが、まさに羊の皮をかぶった強欲な狼やなあと腹立たしく思います。同様にこの福音書が書かれた当時も、偽メシアや偽預言者が良い顔をして近づき、イエスがキリストであることや、キリストの十字架による救いを否定して教会の人々を混乱に落としいれようとしていたことがうかがえます。使徒言行録の20章には、エルサレムに戻る途中のパウロがミレトスというところでエフェソの長老たちを呼び集め、「私が去った後に、残忍な狼どもがあなたたちの所へ入り込んできて群れを荒らすことが、私には分かっています」といって警告をしている様子が書かれています。偽預言者、つまりニセモノに注意しなさい、とのことでしたが、私たちはそれに対してどう注意すれば良いのでしょうか。

イエスは「あなた方はその実で彼らを見分ける」と言います。良い木は良い実を結び、悪い木は悪い実を結ぶのだと。つまり「いいことをする者は良い者で、悪いことをする奴は悪者だ」と。そら分かるけど、その「実」がいい物か悪い物かが分からんのや……って言いたくなります。しかも神様はもともと私たち全てをよいものとしてお造りになったはずで、神様は世界のはじめに創られたそれぞれのものを見て「良しとされた」とあります。神様が世界を創り終えられた後に「神はお造りになった全てのものをご覧になった。見よ、それは極めて良かった」ともあります。私たちだって、もともと良いものとして創られたはずで、はじめから悪い木としてつくられてはいないはずで、だったら悪いことする奴なんていないはずではないか？しかし、私たちが世界の初めに蛇にそそのかされて罪を犯したアダムとエバの末裔まつえいだということによるならば、パウロの言うように「正しい者は一人もない」のだから、みんな悪い木のはずなのでは？ 良い実を結ぶ良い木など！本もないはずではないのか？……何か頭がこんがらがって分からなくなります。

そこで、切り口を変えて、偽預言者の「偽」という字に注目してみたいと思うのですが、「偽」という字はもともと「人が何かをわざとする」とか「人の真似をする」といったことを表す漢字で、そこから「ごまかす・だます」の意味になっていったのだそうです。私たちは何をするにも、知らず知らずのうちに人の存在を、人の目を、人の評価を気にしてしまっ、人に評価してもらうためにわざと何かしてみたり、あるいは失敗して評価を下げることをないように、うまくやっている誰かのまねをして無

難にやり過ぎそうとしたりしてしまっていないか。そうやって自分の本心・自分のありのままでもないのに、人前でうまく取り繕ってやり過ぎそうとする姿勢こそが、ごまかし・だまし・偽りと言えるのかもしれませんが。もともとよいものとして造られたはずの私たちでも、偽りの気持ち——すなわち人の目や人からの評価を気にして、自分の評価が下がらないようにするく、うまくやり過ぎそうという動機——によって起こした一つ一つの行動は、本来の自分が結ぶはずではない偽物の実なのではないでしょうか。偽物の実が必ずしも悪い実かどうかは分かりませんが、少なくともよい実ではないかもしれません。そして先ほどの話で、バーベキューの場で友人を殴り飛ばした友人も、形だけ見ると「人を殴る」という悪いことですが、それが本物の彼の気持ちから出たものであることを思えば、少なくとも問答無用で絶対に悪い、とも私には言えないのです。

良い悪いではなく、本物偽物という意味では、「茨からぶどうが、アザミからいちじくが採れるだろうか」とイエスが言われています。これは茨やアザミが悪い木だという意味ではないのです。茨やアザミはここでは悪い例として挙げられているようにも思えますが、じつはこれらは薬用としても役に立つ植物であり、つまりここでは、茨には茨の役目があり、アザミにはアザミの価値が神様によって与えられているのだという、実はごく当たり前のことを、イエスが改めて私たちに気付かせようとして話して下さっているわけです。偽預言者たちや悪い実を結ぶ者たちは、茨でありながらぶどうの実をつけるように思わせたりして私たちにだまし、惑わせようとしているのだと。

このように私たちは、その実を見て本物か偽物か見分ける力を養っていかねばなりません。それと同時に、自分の歩みが神様に背を向けたものでないか、隣人に対して真実の愛を込めて働きかけているか、本来の自分とかけ離れた実を結ぶことができるように装ってはいないか、すなわち偽りの悪い実を結んでしまっていないか、神様に祈りつつ自分の姿を改めて振り返っていきたいと思います。もし私たちが偽物の実・悪い実を結んでしまっていたなら、私たちは来るべき日に切り倒されて火に投げ込まれることのないように、神様に対して罪を悔いて改めなければいけない。そして私たちが自分の結んでしまった偽物の実・悪い実について心から悔い、改めようとするとき、神様は復活の主イエスと共に私たちに新たな歩みへと押し出す大きな許しを与えて下さることを信じたいと思います。

相手が本物か偽物か見分けることは実際には難しいものの、まずは自分の姿を振り返りつつ、訪問販売にはくれぐれも気をつけていきたいと思います。